

衣の自給の社会的意義と可能性

—実践活動「糸紡ぎ体験会in大原」を通じて—

大 石 尚 子

(博士前期課程 2007年度生)

1. はじめに

2007年度に同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コース（以下「SIコース」と略記）に入学した筆者は、「スロー・クローズの社会的意義とその検証」という研究テーマを掲げた。研究方法の一つは、後述する仮説を社会実験的手法で証明するということである。具体的には、SIコースの学外社会実験施設である「農縁館・結の家」と隣接する農地において行った社会実験「糸紡ぎ体験会in大原」の経過を記録・記述し、それをできるだけ客観的に分析するという手法である。本稿は、筆者の研究の中核部分となるこの社会実験の中間報告である。

2. 衣の現状と生活世界の植民地化

まず、本研究の背景と仮説について述べる。

かつて日常着は100%自給自足であった。人々は畑で綿や麻を栽培し、糸にして染め、手織りによってまとう布を家内で生産していた。それは遠い昔のことではない。実際、糸紡ぎや機織りが日常生活の一風景であったことを記憶している団塊世代も少なくないであろう。ところが、高度成長期を経て消費経済が爆発的に拡大し、生産者＝消費者（prosumer）であった時代はわが国でも過去のものとなってしまった。現代の日常生活においては、服は買うものであって、自らの手でつくることなど、想像すらできないのではないか。

産業革命以降、機械制大工業と貨幣経済の発

展によって、すべてが貨幣と交換される対象物となるにつれ人間が自らの生活に必要な資財を自ら生産する機会と必要性が激減し、人間の労働自体も商品化、つまり賃労働化された。その中で、人間は、土地との関係の上に築かれた共同体を捨てて都会に移動し、生産するための土地や道具という資本を持たない「無産者」を多く生み出すこととなった。このことが貧富の格差を拡大させ、人間関係は物象化の一途をたどるわけだが、私は、こうした土地と自然と人の分断が、人々が自立的に生きることを不可能にし、ユルゲン・ハバーマスのいうところのシステム世界による生活世界の植民地化を容易に加速させることとなったと考える。

マハトマ・ガンジーは、機械化の第一の弊害は、機械によって人が依存的になることだと考えた。機械化により、本来自らの手で生産するという人間の喜びであった労働は、賃金を得るために課せられたものとなり、依存的となった人間は慢性的な欲求不満に陥ることとなった。¹

そこでガンジーは、人々に働くことの喜びを思い出してもらおうと、誰にでもできる糸紡ぎという仕事を提供し、そのことによってインドを貧困に陥れている経済の仕組みを変えていければと考えた。生産の現場が生活世界から隔離されるにつれて、人は無責任となる。衣・食・住の営みを地域の人々と担い、責任と義務を負うことこそが、社会から貧富をなくし、暴力を追放し、人々が人間らしく生きることを可能にするとガンジーは説いた。彼はその中で、真っ先に人々が失った衣の自給を第一に訴え、日常着る物を自らの手で生産することで、自立の精神を培うことができるとした。インドにおいて、

¹ 片山 佳代子「ガンジー思想と私」*Peace Net News*, No.200（2004年12月10日）

綿衣料は一大産業であり、綿花から衣料にするまでの工程には手仕事が必要とされ、多くの人々に労働を与えていた。しかし、産業革命以降、インド国民自らが、生産の場と生産手段をイギリスに奪われてしまい、その結果、人々は仕事を失い、自らの手で貧困を招いてしまったからだ。

現代社会にこのガンジー理論をそのままあてはめることは妥当ではないにしても、今世界は、人間的普遍的道德観の喪失、環境破壊、天然資源の枯渇という危機的状態にある。そのような危機を克服する方策として、現在支配的な成長至上主義的経済システムのオルターナティブを模索する人々は少なからず存在する。そのような代替的経済システムを実現可能にするには、まず環境や資源の有限性を認識した上で、無限の成長を追求する物質至上主義の上に築かれた我々の価値観を変える必要があるだろう。

ところで、近年、雑誌や新聞等で、自給自足の生活を求めて都会から田舎に移り住む若者の記事をよく目にするようになった。また、塩見直紀氏が提唱している「半農半X」という概念が広く若者に支持されている現状も、人間と農のつながりの重要性に気づき始めている証拠といえるだろう。

食については、日本でも食育基本法（平成17年法律第63号）や、有機農業推進法（有機農業の推進に関する法律、平成12年法律第112号）などが制定され、人々の関心が高まっている。しかしながら、同じように人間生活に欠かせない衣料については、あまり多くを語られることはない。それは、インドと同様に、産業革命によって、真っ先に人々の生活からその生産の現場が消え、衣服も農作物であるという事実を、多くの人が忘れ去っていることからだろう。

口に入る農作物に隠れてその実情はあまり知られていないが、例えば綿の栽培では、世界中で使われる殺虫剤の25%、また農薬（除草剤、殺虫剤、落葉剤など）の約10%が使われている。また、アメリカにおいて遺伝子組み換え種子の普及率は2005年には79%に達しており、他国にも普及しつつある。産地では、生物の生息しない湖が広がり、土地の砂漠化が深刻化する中、オーガニックコットンの生産量は増えているが、その割合は通常の綿花生産の0.1%にも満た

ない規模である。²

筆者は、このような背景を認識しつつ、近代化に伴い、真っ先に生産の場が生活空間から切り離され外部化された衣を、もう一度自らの手で種から作り上げるという行為によって、人々が貨幣に換算されない価値を見出し、システム世界に翻弄されない自立的生活を実現するきっかけになり得るのではないかと、また、そのことが持続可能な社会を生み出す力となるのではないかと、という仮説を措定し、それを実証する研究を進めてきた。そのための社会実験では、〈種→糸→布〉の工程の中で、〈種→糸〉の部分を取り上げ、種から育てた綿を収穫し糸を紡ぐという体験によって、人がどのようなことに気づき、学ぶのか、また、いかに人の価値観や行動様式に影響を及ぼすかを観察し分析することを目的とした。換言すれば、この実験への参加者が、上記の作業を経験することによって、人間の生活が自然の恩恵の上に成り立つということを認識し、自ら生産することの意義を発見し、その結果、現在の日常的生活行動や様式を見直し変えていくべきであるという意識を抱くようになるのではないかとという仮説を検証したいと考えたのである。

次に、社会実験「糸紡ぎ体験会in大原」について報告する。

3. 種まき

毎日着る服は、元来、動物性繊維を除いて、食べ物と同様、植物を介して土からできてくるものであった。このことを実感し体験してもらうには、その原料の栽培地と継続的に観察してもらう時間と機会が必要であった。

折しも、筆者がSIコースに入学した前年より、京都市左京区大原地区にある学外社会実験施設「農縁館・結の家」とその農地では、同コース院生による総合的食育体験活動社会実験「食育ファームin大原」事業（以下食育ファーム）がスタートし、2007年度も継続することとなっていた。そこで、筆者はこの体験活動とタイアップして、衣と食をトータルで体験してもらうことを提案し、食育ファームの責任者西村和代氏（2008年度にSIコース博士後期課程に入学）と

² 『繊維学会誌』 Vol.62, No.7 (2006), p.189, p.192

農地管理者渡辺雄人氏（2008年度にSIコース博士後期課程に入学）の協力を得て、綿の栽培を、食物を栽培している畑に隣接する畑地で、糸紡ぎ作業を農縁館・結いの家で、それぞれ行う研究計画を立案し、実施した。

実施期間は、綿の種まき準備から、収穫、その収穫した綿を使つての糸紡ぎ体験まで2007年4月から2007年11月までとした。対象は、食育ファームの参加者とそのスタッフとした。

実験の趣旨は、綿の栽培から収穫、そして実際糸にするまでを体験することが、子どもや大人にどのようなインパクトを与えるのか、また、認識、価値観、行動にどのような変化を生むのかを観察し分析することによって、衣の自作・自給という「スロー・クローズ」の可能性を明らかにすることであった。この社会実験は、いわば、筆者の研究活動自体にとっても、“種まき”作業と位置づけることができる。

糸紡ぎ体験会は10月と11月の2回行い、同志社小学校の親子が延べ51人参加した。社会実験としての観察の方法として、参加者了解の上、その作業の模様を撮影し、また会話を録音し、また、記述式のアンケートを配布し記入を依頼した。とくに子ども用アンケート用紙には、絵を自由に書く欄を設け、その場の気持ちや感じたことを視覚的に表現できるような形式にした。

次に、体験活動の具体的内容と糸紡ぎ体験が参加者に与えた影響と変化を紹介する。

4. 糸紡ぎ体験会実施まで

綿を栽培する農地は、ちょうど食育ファームで使用していた畑に隣接する畑地を使用することで、参加者が農作業するかたわら綿の成長が見える場所を選んだ。

播種する綿は40種ある和綿の中でも、寒さ、湿気に強いとされる伯州綿と、アメリカ綿系のカラードコットン（初めから色のついた綿）で茶色と緑色のものの3種類を用いた。綿にも種類があり、その産地によって違った性質をもつことを実体験してもらうためである。

筆者は食育ファームのスタッフとして参加していたが、花が咲くまでは当該畑に植えられている植物については明らかにしなかったが、種

まき後、芽を出した頃には、4名の大人が、また、4、5名の子どもが、「これなに？」と質問してきた。大人に、これが綿であることを告げると、「え、綿って木からとれるの？」と驚いた反応が返ってきたのが印象的であった。子供については、「みんなの着ているお洋服のもとがとれるんだよ。」と説明してもピンとくる様子ではなかった。花の咲く8月に、これが綿であることを説明し、綿の採れる時期に糸紡ぎ体験会を開催すること告げ、参加者を募った。

予想以上に参加希望者があり、当初1回の予定を、2回行うことにした。

5. 糸紡ぎ体験会in 大原

開催日時は、第1回目は10月21日、第2回目は11月10日、両日とも午前10時30分から15時まで行った。午前中には屋内にて、最初30分ほどは、収穫した3種類の綿を実際に触ってもらい、その違いを実感してもらった。その後、綿の由来、産地によっての性質の違いなどを説明した。その後糸紡ぎを親子一緒に体験してもらった。5台の糸車を用意したので、1グループ5名前後の5つのグループに分かれてもらい、親子は同じグループに入ってもらった。

昼食をはさんで午後からは、畑に出て実際に綿の収穫をした後、再び屋内に戻って、今度は別の作業を行った。綿花には当然種が入っているので、その種を綿から取り出す作業、「種繰り」と、種を取り出した綿を紡ぎやすいように繊維をほぐす「弓うち」の作業である。種繰りは、種繰り機という昔ながらの木製の機械を使うが、この作業は3～4歳児でもできる単純作業である。種繰り機は2台設置した。また、弓うちは、その名の通り、竹製の弓を使うもので、5本用意した。

ここからは、フィールドノートと会話の録音から現場の状況を紹介する。

糸を紡ぐ日本式糸車の説明をし、筆者自身が、綿を糸に紡ぎ始めると、周りで見っていた親子から「わー！」「え～？」という声が上がった。何もない棒先から糸ができるという、予想していなかった事態が起ったので、いったいどうなっているのか不思議で仕方がない様子であった。参加者のうち、とくに父親たちからは糸車

のメカニズムに関する質問が出た。仕組みを説明すると、「理屈はわかるねんけど、うまくいかへんなあ。」とつぶやきながら、体験会終了間際までずっと糸を紡ぎ続けた父親もいた。糸車の台数が限られていたので、グループに分かれてもらい、親子5人ほどで一台の糸車を交替で使用してもらったが、どのグループでも、「もっとゆっくり回したらうまくいくとちゃう?」「〇〇ちゃん、綿ふんわり持たなあかんよ。」と、大人が子どもにアドバイスする。逆に、子どもの方がうまく糸を紡ぎ、親に教えるというケースもあった。母親の会話では、「あんだ、こんなにじっと座ってるの、初めてちゃう? 学校でもそうしてくれたらいいのに。」や、「これが、洋服になるんだよ。」「はよ、次替ってよ。」大人子ども入り混じっての“糸紡ぎ合戦”が繰り広げられた。その中で、やはり糸紡ぎは難しいと諦める子どもたちも現れた。

しかし、すぐに別の道具を見つけ出し、綿の種繰りという作業に没頭し始めた。これは、先に述べた種繰り機という道具を使って、綿の中にある種と綿とを分ける単純な作業であるが、2台とも、子どもに常に囲まれており、最後には、2人の女の子が独占してしまい、帰る間際まで、ずっとハンドルを回していた。簡単な作業だが、うまくするにはちょっとしたコツも必要であるし、また、なによりおもちゃでない本物の道具を使うことが子どもにとって魅力のようであった。その証左に、後で書いてもらったアンケートの自由欄に、非常に緻密に道具の絵を描いてくれた子どももいた。

「昼食の時間です。」と告げても、ほとんど皆作業の手を止めず、お汁をお椀に入れて配り始めてようやく作業から離れ始めた。昼食の間は、母親3名と、子ども1名、父親1名が、昼食を早く済ませて、午後のプログラムが始まるまで糸紡ぎをしていた。

午後からは畑で収穫。和綿と米綿では、そのでき方に決定的に違う特徴がある。和綿の綿花は地面のほうに垂れ下がるようにできるが、米綿は上向きにできる。これは、日本では、雨が多いためである。せっかくはじけた綿が濡れると、綿は腐ってしまう。それを避けるために、いわば額を傘代わりにしているのである。一方、アメリカ大陸のような乾燥地では、綿は上に向いている。この説明を実際収穫してもらいなが

ら行った。「へー、えらいなあ。」「その土地にかなったもんができるんやね。」子どもたちは、「あーみつけた!」「アメリカの綿って、なんかまだ固いで。」「日本のほうが取りやすいな。」「どこになってんの?」

「けっこう、(綿を)見つけんの難しいな。」

収穫を終えて屋内に戻った後は、それぞれのグループが自発的に作業を再開していた。糸車のそばには、子ども2名が1台に、他4台には大人たちが座っていた。母親たちの会話では、「こんなはずとしてたいね。」「家に一台ほしいわ、歳いってもできるしなあ。」「なんか邪心が入ると糸きれてしまうわ。」「先生が言っていた意味が、やっとわかってきました。言われたことは理解できるんだけど、実際手を動かして感覚つかまないとできないものですね。」と、もはや筆者に助けを求めることもなく、自分たちどうすればうまく紡げるのか試行錯誤していた。他の子どもたちの作業は、種繰り機、弓うちにそれぞれ分散し、午前中で飽きてしまうのではないかという予想に反して、子どもたちは最後まで道具を使って作業する手を止めなかった。

後で聞いたところによると、ある一組の親子は紡いだ糸を染めたいと、大原地区にある草木染めの工房へ赴き、糸を染め、さらに糸紡ぎも習ってきたとのことである。

6. 結果

印象深かったのは、大人たちの生き生きとした表情と、子どもたちの真剣なまなざしであった。記述式アンケートでは、大人24名中20名から回答があった。最後の感想として、「楽しかった。」「貴重な体験ができてよかった。」といった、珍しい体験ができてよかったにとどまるところもあるが、「一日中やっていたい。」「昔のひとの知恵の素晴らしさを実感しました。」「次は織りを企画してください。」「またやりたい。」「編めるぐらいに量を増やしたい。」といった発展的な意見や感想も少なくなかった。子どもたちの感想としては、いろいろな綿の種類があることや、綿から糸になるところに驚きを感じ、弓がでてきたことへの驚き、また、自由欄には、道具の絵が多く、かなり緻密に描かれていた。

これは、道具の形状やメカニズムを、注意深く観察していた証拠となるだろう。

以上の観察やアンケート結果から、大人がものを作り出すことの喜びを実感したことは確かである。また、糸紡ぎを通して、様々な学びがあることを理解したという感想も多かった。綿の収穫と種類の違いをみることで、地理と農業を学び、おもちゃでなく本物の道具を使い、そのメカニズムを知ることで、先人の英知と科学を学ぶことができるという認識を参加者が抱いたことは、前述の仮説の実証にもつながることと言えよう。

この企画が、「珍しい体験」で終わらないように、アンケートには「できた糸をどうしたいですか？」という設問を加え、糸紡ぎの次に布へのステップがあることを示唆した。

7. 成果と展望

この社会実験で明らかとなったのは、一言で言うと、糸紡ぎの体験は、男女年齢問わず、参加者の認識や価値観に少なからず実質的なインパクトを与えるということである。子どもについて言えば、好奇心から学習に向かわせることができ、しかも能動的・主体的学習に取り組む動機ともなり得るのではないか。また、大人においては、ものづくりの喜びを感じ、子どもに教えられるものが得られたという自信、頭で考えることと実際にやることの違いを理解することができるという点である。この社会実験を手伝ってくれたある学生が、糸紡ぎの効果を以下のように表現してくれた。「糸紡ぎでは、糸が切れるかな？という緊張感と、うまく紡げたと

いう爽快感と、成果物（紡いだ糸）が目に残るという達成感が得られる。」

また、糸を紡ぐという一つの目的のために、親子が同等の立場で協働する場が創出されたことは興味深い。さらに、糸紡ぎに関連する一連の作業の中で、能力にあった仕事の分担が自然に生まれた。例えば、うまく糸紡ぎができる人は糸紡ぎを、糸紡ぎの難しい人は弓うちや種繰りをする。しかし、決してそれぞれがばらばらなことをしているという感覚はなく、そこには目的を共有することから生まれる一種の連帯感があった。糸をつくるという共通目的に向かいながらそれぞれができる作業に専念することが、個々の作業次元のみならずホリスティックな達成感を生み出していき、必然的ともいえる親密で居心地のいい雰囲気を生み出していったのではないかと推測する。

この社会実験だけでは、こうした経験が日常生活にどのような影響を及ぼすかまでは明らかにできない。しかし、今年度は、糸紡ぎから、さらに布にするとところまでを体験する社会実験を行うこととしたい。自らの手で紡いだ糸が身につけるものになったとき、この一連の作業が「珍しい体験」からどのように変化するかを明らかにする予定である。

本研究の仮説の証明には、これから長いスパンでの実践活動と記録分析が必要であるが、2007年度の社会実験ではその基点としての確たる成果を得られたものと総括している。今後も、「スロー・クローズ」という、ソーシャル・イノベーションに連なるオルタナティブな生活価値観の理論的および実証的な追究を進めていきたいと考えている。



「糸紡ぎ体験会in大原」2007年11月10日 種繰り（手前）と糸紡ぎ